

タイの国から

濱田浩正*

はじめに

私は、国際農林水産業研究センター（JIRCAS: Japan International Research Center for Agricultural Sciences）に2000年4月から所属しています。JIRCASは、「国際的な食料・環境問題の解決に向けた農林水産技術の研究開発」を行うため、海外の農業研究機関等との連携・協力の下で国際共同研究を推進し、開発途上の農林水産技術の向上に貢献している機関です。そのJIRCASのプロジェクト研究で、私は2005年5月から東北タイのコンケンに長期派遣研究員として滞在しています。東北タイの農業は天水に頼っていますが、雨季の降水量の変動が大きく、作物生産も不安定です。その問題を解決するための水資源の開発が私の研究テーマです。昨年からは、ラオスでも同様の研究を開始しました。

私と共同研究を実施している機関は、タイ国の土地開発局（LDD: Land Development Department）、コンケン大学（KKU: Khon Kaen University）、ラオス国立農林業研究所（NARFI: National Agriculture Forestry Research Institute）です。

今回は、海外の機関と共同研究をする場合の参考にねればと思います、私の長期派遣の生活の一部を紹介します。

JIRCAS に対する批判

私は、2000年4月から2002年3月までは、企画調整部の研究交流科で、日本に招へいた外国人研究者のお世話をしていましたので、外国人研究者からJIRCASに対する意見などを直接聞くことができました。その中で印象に残っているのは、JIRCASは要求するだけでこちらの要望を聞いてくれない、日本人が勝手に来てデータをとって論文にまとめて私たちには何も報告がないなどの不満でした。JIRCASと相手機関のコミュニケーション不足が原因です。その背景には、業績評価が審査付き論文中心で、相手機関のJIRCASに対する満足度などは考慮されていないことが考えられます。この状況は今も改善されていません。

LDD との関係

私のカウンターパートは、LDDの土壌分類・土地利用部の研究員で、コンケンに滞在していますが、本部は

バンコクにあります。そこで、部長に研究の状況を説明するのとLDDからの要望を聞くために、毎月バンコクのLDD本部に行くことにしました。LDDからの主な要望は、「LDDの職員を日本に派遣して海外の経験を積ませたい」ということでした。その要望をかなえるべく、2005年度は2名の若手職員、2006年度は1名の若手職員、2名の幹部職員を日本に送り込みました。その甲斐があって、LDDは私の現地調査や要望に全面的に協力してくれました。その中には、O大学の「いのち」をまもる環境学教育での大学院生の受け入れもあります。大学院生は2名でしたが、LDDが全面的に協力してくれ、もっと大勢の院生に受けさせたいと考えるほどのすばらしい研修でした。

しかし、2007年度は、LDDからの招へいはJIRCASで認められませんでした。それを部長に伝えた時、「こちらの要望は少ないのに、JIRCASはそれも聞いてくれないのか。なにが何でも若手職員を日本に行かせたい。」と怒鳴られ、落ちこんだのを覚えています。どうしようか悩んでいた時、O大学から、「科研費を獲得して、タイを試験地として研究をしたいので、LDDへの協力をお願いできないだろうか。」という相談があり、そのときの状況を伝え、若手職員を1週間うけいれてもらうことにしました。それで、部長の機嫌も良くなり、窮地を脱しました。また、O大学の現地調査では、私が行ったことの



LDDのスポーツ大会に招待された筆者

*国際農林水産業研究センター

ない南部のプーケットやパンガーは、LDDの方でアレンジしてくれ無事に済ませることができました。

余談になりますが、今のLDDの局長は2006年度に私が日本に招へいた幹部職員で、「困ったことがあったらいつでも相談に来なさい。」とされています。

日本人研究者との関係

私の研究テーマは水資源確保です。非常に広いテーマで、一人ですべてできるものではありません。日本人研究者の協力が必要になります。日本人研究者に協力をお願いする場合、緊急で重要なテーマは経験豊富な研究者、私がある程度カバーできる分野はこれから海外経験を積んだ方がいい若手研究者にしました。海外で現地の人たちと共同で調査をする機会は限られているので、私は若手研究者をできるだけ呼ぶことにしました。さらに、コンケンに来た人たちには、タイ人を対象としたセミナーをやらせてもらいました。セミナーを開催することによって、その人の専門が何か、タイ人にわかってもらえましたし、分野によっては日本の最新技術を紹介することもできました。また、セミナーの後には、日本人研究者とタイ人研究者が情報交換をするようになり、日本とタイの研究協力の強化につながっていると考えています。

海外研修旅行対応

最近、魅力的な大学であることを学生にアピールするため、海外研修旅行をする大学が増えています。その旅行先にコンケンを選ぶ大学もあり、私のところには研修旅行対応の依頼がきます。大学の研修旅行対応については、「JIRCASは旅行会社でないのでできる範囲で対応するように。」とされていますが、大金をはたいてコンケンまで来る学生のことを考えると、どうしても印象に残るものになりたいと思ってしまいます。私が研修旅行に対応する場合、タイではタイ人研究者との連携が重要だということを伝えたくて、現地での説明はタイ人研究者

にお願いしています。また、東北タイの農村の風景が印象に残るように、バスで行くのが困難な一部の区間の移動を馬車やトラクター（後ろの荷台に乗る）にしています。これが学生たちには好評です。また、夕食もこちらで準備し、東北タイの代表的な食べ物である虫の唐揚げも出しています。これも学生たちの話題になっています。学生の研修旅行の準備には時間を割かれますが、学生たちとタイ人の楽しそうな表情を見ると対応して良かったなという気分になります。

今後の課題

私の長期派遣期間は2009年の3月までで、その後、JIRCASはLDDとどのような研究協力をするのか、不透明です。先日、JIRCASの理事長がLDDを訪問した際、LDDからは、「JIRCASとの研究協力をこれからも続けたい」という要望が出され、研究テーマの案が示されましたが、JIRCASの回答は、「これから検討する」というものでした。しかし、具体的な検討はされていません。

今後の課題として、今まで良好な関係を続けてきた国際機関との連携協力を将来どのように継続するかがあげられます。これはJIRCASだけの問題ではなく、日本の研究機関の国際共同研究のあり方にも関連する問題です。いまのところ、プロジェクト研究がなくなれば、個人レベルの情報交換が中心になるとは思いますが、明確な答えが出ていない状況です。

おわりに

私の長期派遣生活の一部を紹介しました。海外で仕事をすることは特別なことのように思えますが、日本で仕事をすると同じで、重要なのは何事にも誠実に対応することだと私は考えます。

受稿年月日：2008年9月8日

受理年月日：2008年9月11日